

研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-131	A-135	15-135	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名（原題／訳）			
Substance Use in the Perinatal Period 周産期の薬物使用			
執筆者			
Forray A, Foster D.			
掲載誌			
Curr Psychiatry Rep. 2015 Nov;17(11):91. doi: 10.1007/s11920-015-0626-5.			
キーワード			PMID
周産期、薬物、たばこ、アルコール			26386836
要 旨			
<p>米国における周産期の薬物使用は、未だ重大な問題である。周産期の薬物使用は、母体および胎児に有害であり、多剤併用は有害事象を増強する。</p> <p>そこで、周産期におけるタバコ、アルコール、大麻、覚せい剤、およびオピオイドの使用、それらの母体と胎児の健康への影響、および現在の治療に関する最近の文献を検討した。</p> <p>アルコールに関連するレビューによると、多くの妊婦は禁酒または節酒に成功するが、アルコール摂取量を減らすことのできなかった女性は 6.4%から 33%に及ぶとの報告がある。周産期の飲酒は、胎児性アルコール症候群や神経の発達及び中枢神経系の障害など胎児への有害な関連を認めるだけでなく、幼少期の言語や認知、実行機能の障害、成人期の心理社会的な影響をも及ぼす。また、胎児と妊娠転帰に及ぼす影響の重症度は、アルコール摂取の時期によって異なるとされている。</p> <p>胎児への飲酒の影響は妊娠中のアルコール摂取を避けることで予防可能であり、簡単な介入、特に動機づけ支援は周産期のアルコール摂取の減少に効果的であると報告された。最近の研究においても、周産期のアルコール摂取予防に社会的支援が重要であると強調している。また、周産期におけるアルコール摂取量の減少効果を比較したランダム化試験では、電話での介入が面接による介入と同等の効果をもつ可能性を示唆していた。費用対効果の観点から、実行可能なモニタリングの手段となり得るかもしれない。</p> <p>また、周産期の飲酒者を対象とし介入を行うために、臨床現場での妊娠中の女性のスクリーニングが提案されている。</p> <p>周産期のアルコール使用のメカニズムを理解し、最良の介入を行うためにさらなる研究が必要である。</p>			